

凸幾何の端点演算子による特徴付けについて

筑波大学社会学系

安藤 和敏

Coma Seminar

2001.5.07

アライメント

X を有限集合とする. X の部分集合族 \mathcal{L} が, 以下の2条件

$$(A1) \quad \emptyset, X \in \mathcal{L}.$$

$$(A2) \quad A, B \in \mathcal{L} \implies A \cap B \in \mathcal{L}.$$

を満足するとき, (X, \mathcal{L}) を **alignment** と呼ぶ. \mathcal{L} の元を **閉集合** と呼ぶ.

アライメント (X, \mathcal{L}) に対して, $\tau_{\mathcal{L}}: 2^X \rightarrow 2^X$ を

$$\tau_{\mathcal{L}}(A) = \bigcap \{C \mid A \subseteq C \in \mathcal{L}\} \quad (A \subseteq X)$$

で定義する. つまり, $\tau_{\mathcal{L}}(A)$ は A を含む最小の閉集合.

Proposition 1: $\tau_{\mathcal{L}}$ は閉包演算子である。 即ち, $\tau := \tau_{\mathcal{L}}$ は以下の (C1)–(C4) を満足する。

$$(C1) \quad \tau(\emptyset) = \emptyset.$$

$$(C2) \quad \forall A \subseteq X: A \subseteq \tau(A).$$

$$(C3) \quad \forall A, B \subseteq X: A \subseteq B \implies \tau(A) \subseteq \tau(B) \quad (\text{Monotonicity}).$$

$$(C4) \quad \forall A \subseteq X: \tau(\tau(A)) = \tau(A) \quad (\text{Idempotence}).$$

□

閉包演算子からアライメント

逆に

Proposition 2: 閉包演算子 $\tau: 2^X \rightarrow 2^X$ が与えられたときに, $\mathcal{L} \subseteq 2^X$ を

$$\mathcal{L} = \{A \mid A \in 2^X, \tau(A) = A\}$$

で定義すると (X, \mathcal{L}) はアライメントになる. さらに, $\tau_{\mathcal{L}} = \tau$. \square

- 以降は, \mathcal{L} が文脈から明らかなきときは $\tau_{\mathcal{L}}$ の代わりに τ と書いたりする.

例

- 有限集合 $X \subseteq \mathbb{R}^n$.

$$\tau(A) = \text{conv.hull}(A) \cap X \quad (A \subseteq X).$$

$\mathcal{L} =$ “凸集合”全体

- 有限半順序集合 $P = (X, \preceq)$.

$$\begin{aligned} \tau(A) &= \{x \mid x \in X, \exists a \in A: x \preceq a\} \\ &= A \text{ で生成されるイデアル.} \end{aligned}$$

$\mathcal{L} = P$ のイデアル全体.

端点演算子

(X, \mathcal{L}) をアライメントとする.

- 部分集合 $A \subseteq X$ に対して, $\tau(S) = \tau(A)$ となる $S \subseteq A$ を, A の **spanning set** と呼ぶ. 特に, A の極小な **spanning set** を **基底** と呼ぶ.

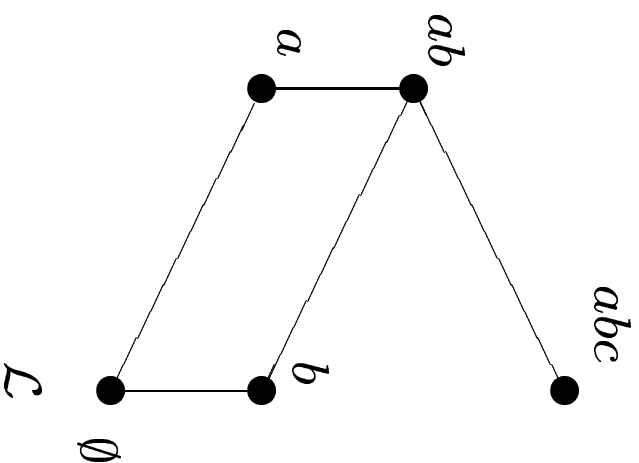
- $\text{ex}: 2^X \rightarrow 2^X$ を

$$\text{ex}(A) = \{p \mid p \in A, p \notin \tau(A - p)\} \quad (A \subseteq X)$$

で定義し, (X, \mathcal{L}) の **端点演算子** と呼ぶ. $p \in \text{ex}(A)$ は, A の **端点** と呼ばれる. (X, \mathcal{L}) の端点演算子であることを強調するために ex の代りに $\text{ex}_{\mathcal{L}}$ と書くこともある.

- $A \subseteq X$ は, $\text{ex}(A) = A$ のとき **free** と呼ばれる.
 $\text{ex}(\mathcal{L}) = \text{the free sets of } (X, \mathcal{L})$ とする.

Example 3:



$$\bullet \mapsto abc$$

$$\bullet \mapsto ab$$

$$\bullet \mapsto ca$$

$$\bullet \mapsto bc$$

$$\bullet \mapsto a$$

$$\bullet \mapsto b$$

$$\bullet \mapsto c$$

$$\bullet \mapsto \emptyset$$

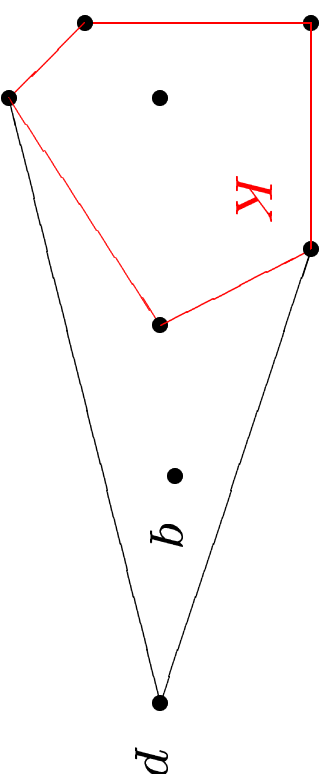
$$\text{ex: } 2^X \rightarrow 2^X$$

$\text{ex}(\mathcal{L}) = \{\emptyset, \{a\}, \{b\}, \{c\}, \{a, b\}\}$ である.

凸幾何

アライメント (X, \mathcal{L}) は以下の**反交換公理**

(AE) $\forall K \in \mathcal{L}, \forall p, q \notin K: q \in \tau(K \cup p) \implies p \notin \tau(K \cup q)$.



を満足するとき, **凸幾何**と呼ばれる. アライメント (X, \mathcal{L}) が凸幾何であるとき, 閉集合 $K \in \mathcal{L}$ のことを特に**凸集合**と呼ぶこともある.

Theorem 4 (Edelman and Jamison): アライメント (X, \mathcal{L}) が凸幾何であることと以下の全ては同値.

- (a) 任意の閉集合 $K \neq X$ に対して, $K \cup p$ が閉であるような $p \in X$ が存在する.
- (b) 任意の $A \subseteq X$ は一意的な基底を持つ.
- (c) 任意の閉集合 K に対して, $K = \tau(\text{ex}(K))$ (有限 Minkowski-Krein-Milman 性).
- (d) 任意の閉集合 K と $p \notin K$ に対して, $p \in \text{ex}(\tau(K \cup p))$.

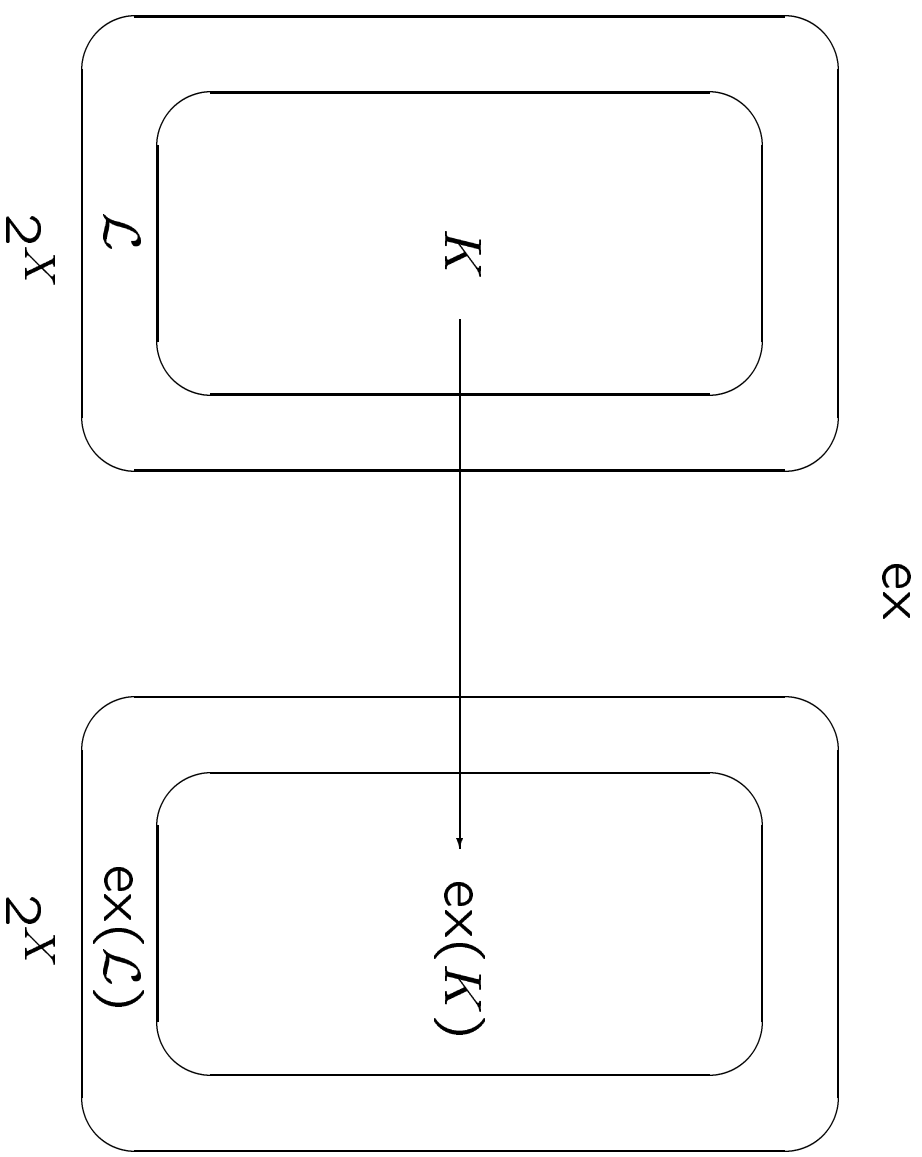
結果

Theorem 5: アライメント (X, \mathcal{L}) が凸幾何であることと以下の全ては同値.

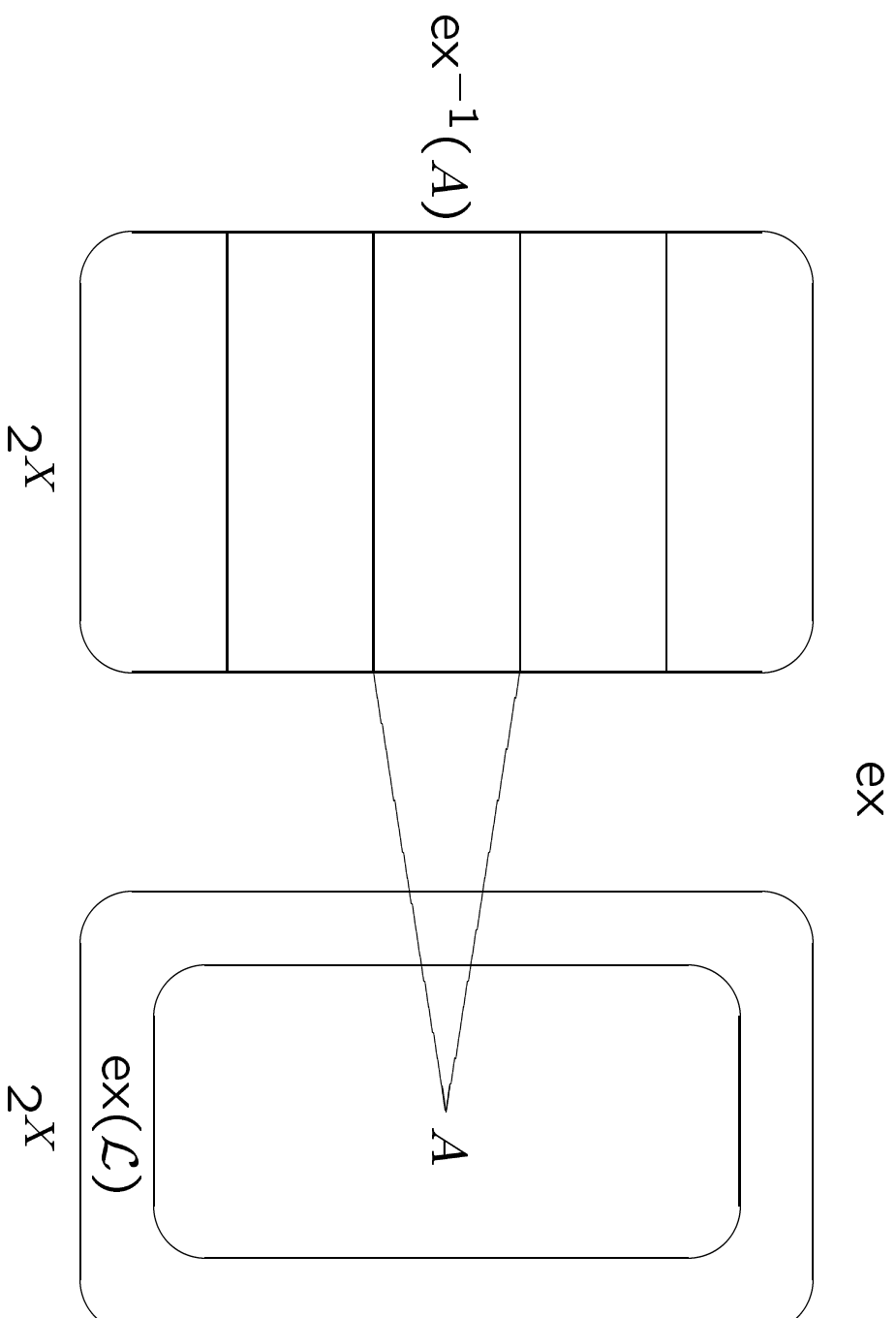
- (1) *Minkowski-Krein-Milman* 性の逆: $\forall A \subseteq X: \text{ex}(\tau(A)) = \text{ex}(A)$.
- (2) $\text{ex}|_{\mathcal{L}}: \mathcal{L} \rightarrow \text{ex}(\mathcal{L})$ が全単射.
- (3) PI: $\forall A, B \subseteq X: \text{ex}(A \cup B) = \text{ex}(\text{ex}(A) \cup \text{ex}(B))$.
- (4) *Aizerman*: $\forall A, B \subseteq X: \text{ex}(B) \subseteq A \subseteq B \Rightarrow \text{ex}(A) \subseteq \text{ex}(B)$.
- (5) 各 $A \in \text{ex}(\mathcal{L})$ に対して, $\text{ex}^{-1}(A)$ が区間である.

□

特徴付け (2) — $\text{ex}|_{\mathcal{L}}: \mathcal{L} \rightarrow \text{ex}(\mathcal{L})$ が全単射 —



特徴付け (5) — $\text{ex}^{-1}(A)$ が区間 —



Koshevoy の端点演算子の特徴付けの別証

Theorem 6 (ほとんど Koshevoy): A mapping $S: 2^X \rightarrow 2^X$ is the extreme operator of a convex geometry if and only if it satisfies

$$(EX1) \quad \forall A \subseteq X: S(A) \subseteq A.$$

$$(EX2) \quad \forall p \in X: S(\{p\}) = \{p\}.$$

$$(EX3) \quad A \subseteq B \subseteq X \Rightarrow S(B) \cap A \subseteq S(A) \quad (\text{Chernoff}).$$

and

$$(\text{Aizerman}) \quad \forall A, B \subseteq X: S(B) \subseteq A \subseteq B \Rightarrow S(A) \subseteq S(B).$$

□

アライメントの端点演算子に関する諸命題

Proposition 7: $A \subseteq X$ が閉であるための必要十分条件は, 任意の $p \notin A$ に対して $p \in \text{ex}(A \cup p)$ となることである.

(Proof) (十分性:) A を閉とする. $p \notin A$ ならば, $\tau((A \cup p) - p) = \tau(A) = A \not\ni p$. よって, $p \in \text{ex}(A \cup p)$.

(必要性:) 任意の $p \notin A$ に対して, $p \in \text{ex}(A \cup p)$ とする. すると, $p \notin A$ ならば $p \notin \tau((A \cup p) - p) = \tau(A)$. 即ち, $\tau(A) \subseteq A$. \square

Proposition 8 (Edelman and Jamison): $A \subseteq X$ として, $B \subseteq A$ を A の任意の *spanning set* とするとき, $\text{ex}(A) \subseteq B$.

(Proof) B を A の基底として, p を A の端点とする. もし, $p \notin B$ であれば, $B \subseteq A - p$ であるから, $\tau(B) \subseteq \tau(A - p) \subsetneq \tau(A)$. これは, B が A の基底ということに反する. \square

Proposition 9 (Chernoff性; 柏原-岡本 for cg): $A \subseteq B \subseteq X$ ならば, $\text{ex}(B) \cap A \subseteq \text{ex}(A)$ である.

(Proof) $p \in \text{ex}(B) \cap A$ ならば, $p \notin \tau(B - p)$ である. さらに $\tau(A - p) \subseteq \tau(B - p)$ であるから, $p \notin \tau(A - p)$. \square

Proposition 10 (柏原-岡本 for cg): K を閉集合とするとき, p が K の端点であるための必要十分条件は $K - p$ が閉になることである.

(Proof) (必要性:) $p \in K$ を K の端点とする. $\tau(K - p) \subseteq K - p$ を示せば良い. $\tau(K - p) \subseteq \tau(K) = K$. また p は端点であるから, $p \notin \tau(K - p)$. ようして, $\tau(K - p) \subseteq K - p$.

(十分性:) これは明らか. \square

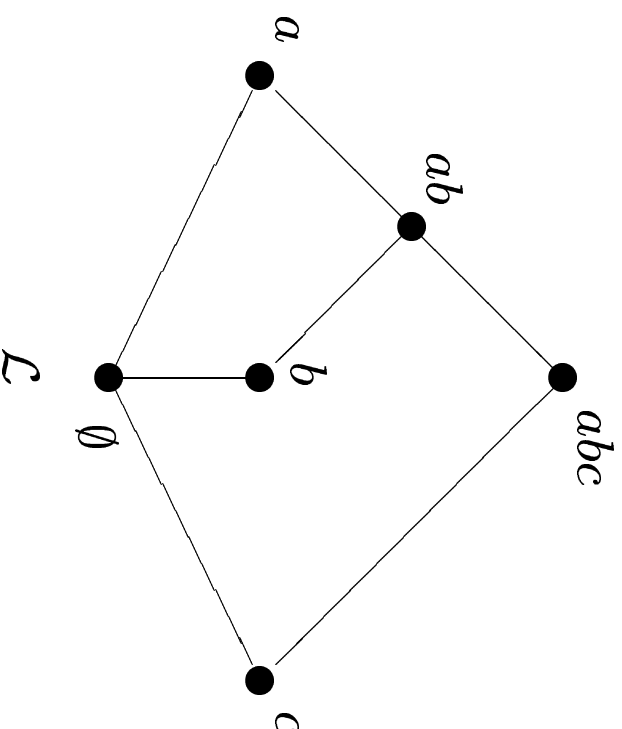
Lemma 11: 任意の $A \subseteq X$ に対して, $\text{ex}(\tau(A)) \subseteq \text{ex}(A)$.

(Proof) $p \in \text{ex}(\tau(A))$ とすると, $p \notin \tau(\tau(A) - p)$.

$$A - p \subseteq \tau(A) - p \Rightarrow \tau(A - p) \subseteq \tau(\tau(A) - p)$$

ゆえに, $p \notin \tau(A - p)$. また $p \in \tau(A)$ であるから, $A \neq A - p$, 即ち, $p \in A$ でないといけない. よって, $p \in \text{ex}(A)$. \square

Remark 12: 例えば, 下図で表されるようなアライメント (X, \mathcal{L}) を考えよう. ここで, $X = \{a, b, c\}$, $\mathcal{L} = \{\emptyset, \{a\}, \{b\}, \{c\}, \{a, b\}, \{a, b, c\}\}$ である.



$A = \{a, c\}$ とすると, $\text{ex}(A) = \{a, c\}$ であるのに対して, $\tau(A) = \{a, b, c\}$ であるので, $\text{ex}(\tau(A)) = \{c\}$ となるので, $\text{ex}(\tau(A)) \not\subseteq \text{ex}(A)$ である.

Theorem 13: アライメント (X, \mathcal{L}) が凸幾何であるための必要十分条件は、任意の $A \subseteq X$ に対して $\text{ex}(A) = \text{ex}(\tau(A))$ となることである。

(Proof) 補題 11 によって、一般に $\text{ex}(A) \supseteq \text{ex}(\tau(A))$ である。もし、 \mathcal{L} が凸幾何であるならば定理 4(c) によって、 $\text{ex}(\tau(A))$ は A の spanning set であるから、命題 8 より $\text{ex}(A) \subseteq \text{ex}(\tau(A))$ 。

逆に \mathcal{L} が凸幾何でないとする。定理 4(d) によって、ある閉集合 K と $p \notin K$ が存在して、 $p \notin \text{ex}(\tau(K \cup p))$ 。ところが、命題 7 によって、 $p \in \text{ex}(K \cup p)$ であるから、 $\text{ex}(K \cup p) \not\subseteq \text{ex}(\tau(K \cup p))$ 。□

Corollary 14: アライメント (X, \mathcal{L}) が凸幾何であるための必要十分条件は、任意の $A \subseteq X$ に対して $\tau(A) = \tau(\text{ex}(A))$ となることである.

(Proof) 十分性は定理 4(c) より従う. 必要性を証明するために, \mathcal{L} が凸幾何として, $A \subseteq X$ を任意とする. 定理 4(c) と定理 13 によって, $\tau(A) = \tau(\text{ex}(\tau(A))) = \tau(\text{ex}(A))$ である. \square

凸幾何の端点集合の族

Proposition 15 (Idempotency): (X, \mathcal{L}) をアライメントとする. 任意の $A \subseteq X$ に対して, $\text{ex}(\text{ex}(A)) = \text{ex}(A)$.

(Proof) $\text{ex}(A) \subseteq A$ であるから, 命題 9 によって $\text{ex}(A) = \text{ex}(A) \cap \text{ex}(A) \subseteq \text{ex}(\text{ex}(A))$. \square

(X, \mathcal{L}) をアライメントとする. $\text{ex}(\mathcal{L}) \subseteq 2^X$ を

$$\text{ex}(\mathcal{L}) = \{ A \mid A \subseteq X, \text{ex}(A) = A \}$$

と定義する. 命題 15 によって, 写像 $\text{ex}: 2^X \rightarrow \text{ex}(\mathcal{L})$ は, well-defined である.

Theorem 16: アライメント \mathcal{L} が凸幾何であれば, $\text{ex}|_{\mathcal{L}}: \mathcal{L} \rightarrow \text{ex}(\mathcal{L})$ が全単射となる.

(Proof) 定理 13 によって, $\text{ex}(A) = \text{ex}(\tau(A))$ である. したがって, $\text{ex}|_{\mathcal{L}}$ が全射であることは明らか.

$K, K' \in \mathcal{L}$ かつ $\text{ex}(K) = \text{ex}(K')$ ならば MKM 性 (定理 4(c)) によって $K = \tau(\text{ex}(K)) = \tau(\text{ex}(K')) = K'$. \square

Corollary 17: アライメント (X, \mathcal{L}) が凸幾何であるならば, 各 $\emptyset \neq A \subseteq X$ に対して $\text{ex}(A) \neq \emptyset$ となる.

(Proof) (X, \mathcal{L}) を凸幾何であるとする. $A \subseteq X$ とする. $\text{ex}(A) = \emptyset$ ならば, 系 14 によって, $\text{ex}(\tau(A)) = \emptyset$. さらに, 定理 16 によれば, $\tau(A) = \emptyset$ であるから, τ の単調性によって $A = \emptyset$. \square

定理 16 の逆も言える.

Theorem 18: $\text{ex}|_{\mathcal{L}}: \mathcal{L} \rightarrow \text{ex}(\mathcal{L})$ が一対一対応であるならば, (X, \mathcal{L}) は凸幾何である.

(Proof) $\text{ex}|_{\mathcal{L}}: \mathcal{L} \rightarrow \text{ex}(\mathcal{L})$ が一対一対応であるとする. もし, (X, \mathcal{L}) が凸幾何でないのならば定理 4(c) によって, ある閉集合 $K \in \mathcal{L}$ が存在して, $K \not\subseteq \tau(\text{ex}(K))$ となる. K として, そのような閉集合のうちで $\text{ex}(K)$ が極大なものを選ぼう.

B を K のある基底とすると, $\text{ex}(K)$ は K を張れないから $B \not\subseteq \text{ex}(K)$ である. さらに, $B \in \text{ex}(\mathcal{L})$ である. なぜならば $b \in B$ とすると, B は K の極小な spanning set であるから, $\tau(B-b) \subsetneq K = \tau(B)$. したがって, $b \notin \tau(B-b)$ だからである. $\text{ex}|_{\mathcal{L}}$ が全単射であるから, ある $K \neq L \in \mathcal{L}$ が存在して $B = \text{ex}(L)$ となる. ところが, K の選び方から $L = \tau(\text{ex}(L)) = \tau(B) = K$. これは矛盾である. \square

したがって、以下の系を得る.

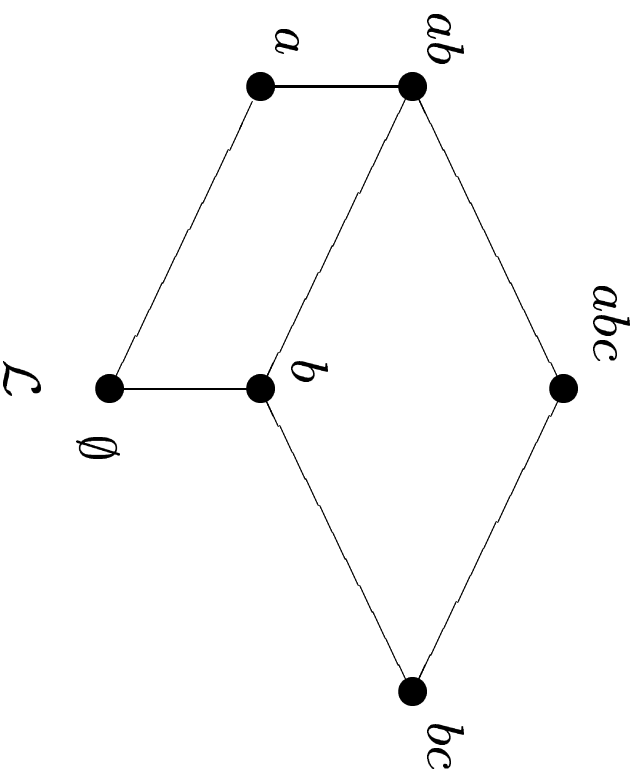
Corollary 19: アライメント (X, \mathcal{L}) が凸幾何であるための必要十分条件は,

$\text{ex}_{\mathcal{L}}: \mathcal{L} \rightarrow \text{ex}(X)$ が全単射となる事である. \square

Proposition 20 (柏原-岡本 for cg): \mathcal{L} をアライメントとする. $A \in \text{ex}(\mathcal{L})$ かつ $B \subseteq A$ ならば $B \in \text{ex}(\mathcal{L})$.

(Proof) $A = \text{ex}(A)$ とする. 命題9により, $B = B \cap A = B \cap \text{ex}(A) \subseteq \text{ex}(B)$. また, $\text{ex}(B) \subseteq B$ は定義から明らか. \square

Example 21: 下のハッセ図で示されるアラインメント (実際, 凸幾何) (X, \mathcal{L}) を考える. $X = \{a, b, c\}$, $\mathcal{L} = \{\emptyset, \{a\}, \{b\}, \{a, b\}, \{b, c\}, \{a, b, c\}\}$ である.



$$abc \mapsto ca \quad \bullet$$

$$ab \mapsto ab \quad \bullet$$

$$ca \mapsto ca \quad \circ$$

$$bc \mapsto c \quad \bullet$$

$$a \mapsto a \quad \bullet$$

$$b \mapsto b \quad \bullet$$

$$c \mapsto c \quad \circ$$

$$\bullet \quad \emptyset \mapsto \emptyset$$

$$\text{ex: } 2^X \rightarrow 2^X$$

端点演算子からアライメントを得ること

Proposition 22: 任意のアライメントに対して, $S = \text{ex}: 2^X \rightarrow 2^X$ は, 以下の (EX1)–(EX3) を満足する.

$$\text{(EX1)} \quad \forall A \subseteq X: S(A) \subseteq A.$$

$$\text{(EX2)} \quad \forall p \in X: S(\{p\}) = \{p\}.$$

$$\text{(EX3)} \quad A \subseteq B \subseteq X \Rightarrow S(B) \cap A \subseteq S(A) \quad (\text{Chernoff 性}).$$

(Proof) (EX1) は自明. (EX2) も定義から明らか. (EX3) は命題 9 による. \square

Proposition 23: (EX1) and (EX3) imply the following

(EX4) $\forall A \subseteq X: S(A) = S(S(A))$ (Idempotence).

(Proof) (EX1)によって $S(S(A)) \subseteq S(A)$. 逆の包含関係を示したい. (EX1)によって $S(A) \subseteq A$ であるから, (EX3)によって $S(A) = S(A) \cap S(A) \subseteq S(S(A))$. \square

Proposition 24 (Moulin): Chernoff (Ex3) is equivalent to any one of the followings four conditions provided that (Ex1) holds.

$$(Ex3a) \quad \forall A, B \subseteq X: S(A \cup B) \subseteq S(S(A) \cup B).$$

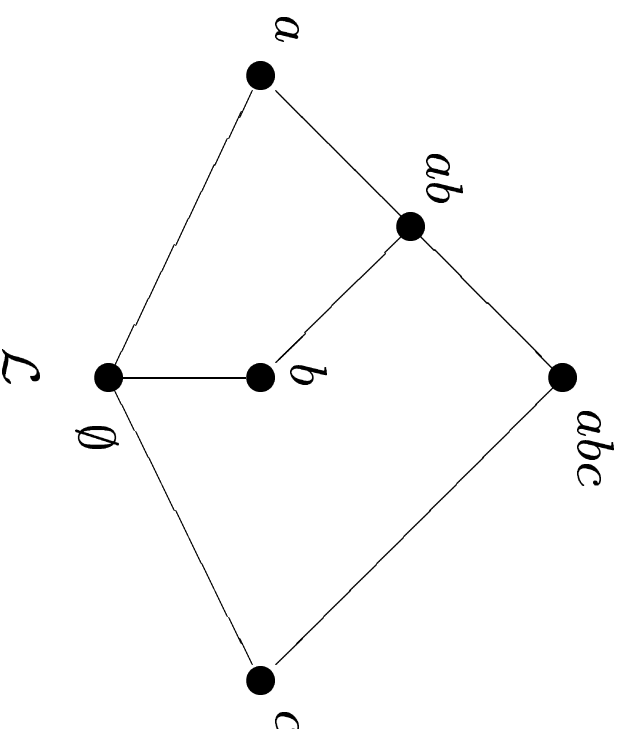
$$(Ex3b) \quad \forall A, B \subseteq X: S(A \cup B) \subseteq S(S(A) \cup S(B)).$$

$$(Ex3c) \quad \forall A, B \subseteq X: S(A \cup B) \subseteq S(A) \cup S(B).$$

$$(Ex3d) \quad \forall A, B \subseteq X: S(A \cup B) \subseteq S(A) \cup B.$$

□

Remark 25: The reverse inclusion, say (Ex3c) , does not hold in general. Consider the alignment (X, \mathcal{L}) in Remark 12. For $A = \{a\}$ and $B = \{b, c\}$ we have $\text{ex}(A) = \{a\}$ and $\text{ex}(B) = \{b, c\}$ but $\text{ex}(A \cup B) = \text{ex}(\{a, b, c\}) = \{c\}$.



Theorem 26: 写像 $S: 2^X \rightarrow 2^X$ に対して, (Ex1)–(Ex3) が成り立つとする. $\mathcal{L} \subseteq 2^X$ を

$$\mathcal{L} = \{A \mid A \subseteq X, \forall p \in X - A: p \in S(A \cup p)\} \quad (1)$$

で定義すると, (X, \mathcal{L}) はアラインメントになる. さらに, 任意の $K \in \mathcal{L}$ に対して $S(K) = \text{ex}_{\mathcal{L}}(K)$ であるが, 一般に $S \supseteq \text{ex}_{\mathcal{L}}$ である.

(Proof) (前半:) $X \in \mathcal{L}$ は自明に成り立つ. (Ex2) によって, 任意の $p \in X$ に対して $p \in S(\{p\})$ であるから, $\emptyset \in \mathcal{L}$ である. したがって, (A1) は示された. (A2) を示そう.

$A, B \in \mathcal{L}$ とする. $p \in X - (A \cap B)$ を考えよう. $p \in X - A$ または $p \in X - B$ であるから, \mathcal{L} の定義より, $p \in S(A \cup p)$ または $p \in S(B \cup p)$ である. (Ex3) を, $(A \cap B) \cup p \subseteq A \cup p$ と $(A \cap B) \cup p \subseteq B \cup p$ に対して適用すると, $p \in S(A \cup p) \cap ((A \cap B) \cup p)$ または $p \in S(B \cup p) \cap ((A \cap B) \cup p)$ であるから, $p \in S((A \cap B) \cup p)$ が得られる. したがって, $A \cap B \in \mathcal{L}$ である.

(後半:) 最初に任意の $A \subseteq X$ に対して, $\text{ex}_{\mathcal{L}}(A) \subseteq S(A)$ であることを示そう.
 $p \in \text{ex}_{\mathcal{L}}(A)$ とすると, $p \in A$ かつ $p \notin \tau(A-p)$. $\tau(A-p) \in \mathcal{L}$ であるから,

$$\forall q \notin \tau(A-p): q \in S(\tau(A-p) \cup q).$$

$p \notin \tau(A-p)$ であるから, $p \in S(\tau(A-p) \cup p)$. $A \subseteq \tau(A-p) \cup p$ かつ $p \in A$ であるから, (EX3) によって $p \in S(A)$.

$K \in \mathcal{L}$ とする. $S(K) \subseteq \text{ex}_{\mathcal{L}}(K)$ を示すためには, 命題 10 によって, 任意の $p \in S(K)$ に対して $K-p \in \mathcal{L}$ という事を示せば良い. $p \in S(K)$ としよう.

$q \notin K-p$ とする. もし $q \neq p$ ならば $q \notin K$ であるから, $K \in \mathcal{L}$ という事によって, $q \in S(K \cup q)$ である. ところで, $K-p \cup q \subseteq K \cup q$ であるから, S に対する Chernoff 性により,

$$q \in S(K \cup q) \cap (K-p \cup q) \subseteq S(K-p \cup q).$$

もし $q = p$ であるのなら, $q = p \in S(K) = S(K-p \cup q)$. ゆえに, $K-p \in \mathcal{L}$.

□

Remark 27: 残念ながら、一般に $S \neq \text{ex}_L$ である。下図で示される $S: 2^X \rightarrow 2^X$ を考えよう。これは、前の例 21 の ex を用いて、

$$S(A) = \begin{cases} \{c\} & \text{if } A = X, \\ \text{ex}(A) & \text{otherwise} \end{cases}$$

と書ける。 S が Chernoff を満足する事を見るためには、任意の $A \neq X$ に対して、 $S(X) \cap A \subseteq S(A)$ を見れば良い。 ex は Chernoff を満すから、

$$S(X) \cap A \subseteq \text{ex}(X) \cap A \subseteq \text{ex}(A) = S(A).$$

他の公理 (EX1)–(EX2) は明らかに満している。

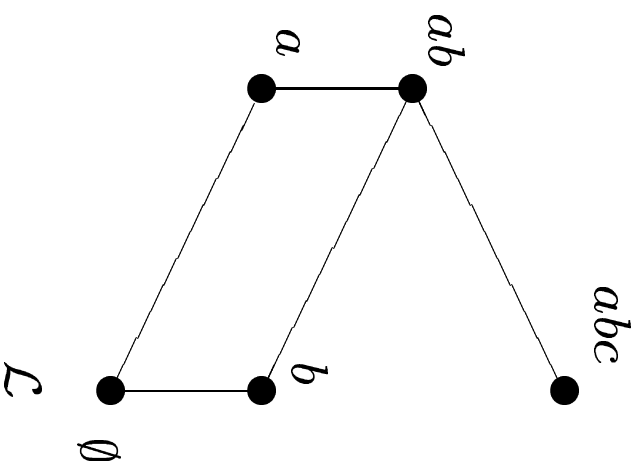
$$abc \mapsto c$$

$$S: 2^X \rightarrow 2^X \quad \begin{array}{ccc} ab \mapsto ab & ca \mapsto ca & bc \mapsto c \\ \bullet & \bullet & \bullet \end{array}$$

$$a \mapsto a \quad b \mapsto b \quad c \mapsto c \\ \bullet \quad \bullet \quad \bullet$$

$$\emptyset \mapsto \emptyset \\ \bullet$$

この S から (1) で \mathcal{L} を定義すると、左の図が得られる。この \mathcal{L} から $\text{ex}_{\mathcal{L}}$ を計算すると、



$$\bullet \mapsto abc \mapsto c$$

$$\bullet \mapsto ab \mapsto ab$$

$$\bullet \mapsto ca \mapsto c$$

$$\bullet \mapsto bc \mapsto c$$

$$\bullet \mapsto a \mapsto a$$

$$\bullet \mapsto b \mapsto b$$

$$\bullet \mapsto c \mapsto c$$

$$\bullet \mapsto \emptyset \mapsto \emptyset$$

$$\text{ex}_{\mathcal{L}}: 2^X \rightarrow 2^X$$

右図となるが、 $\text{ex}_{\mathcal{L}}(\{c, a\}) \subseteq S(\{c, a\})$ である。

凸幾何の ex 演算子による特徴付け

Theorem 28 (Koshevoy): *Suppose that an alignment (X, \mathcal{L}) is a convex geometry. Then, $S := \text{ex}_{\mathcal{L}}$ satisfies following condition.*

$$(PI) \quad \forall A, B \subseteq X: S(A \cup B) = S(S(A) \cup S(B)).$$

□

Let us consider the following condition.

$$\text{(Aizerman)} \quad \forall A, B \subseteq X: S(B) \subseteq A \subseteq B \Rightarrow S(A) \subseteq S(B).$$

Proposition 29 (see e.g. Moulin): *Aizerman is equivalent to the following Aizerman' provided that $S(S(A)) = S(A)$ for every $A \subseteq X$.*

$$\text{(Aizerman')} \quad \forall A, B \subseteq X: S(B) \subseteq A \subseteq B \Rightarrow S(A) = S(B).$$

□

Theorem 30 (Aizerman and Malishevski): Suppose that $(EX1)$ holds. Then,

$$PI \iff \text{Chernoff} + \text{Aizerman}.$$

□

Theorem 31: An alignment (X, \mathcal{L}) is a convex geometry if and only if $\text{ex}: 2^X \rightarrow 2^X$ satisfies Aizerman.

(Proof) Suppose that (X, \mathcal{L}) is a convex geometry. Then, it follows from Theorem 28 and Theorem 30 that ex satisfies Aizerman.

Conversely, suppose that ex satisfies Aizerman. Since we have $\text{ex}^2 = \text{ex}$ by Proposition 23, we have Aizerman' by Proposition 29. Let $A \subseteq X$ be arbitrary. We have from Lemma 11 that $\text{ex}(\tau(A)) \subseteq \text{ex}(A) \subseteq \tau(A)$. Then, by Aizerman we have $\text{ex}(A) = \text{ex}(\text{ex}(A)) = \text{ex}(\tau(A))$. It thus follows from Theorem 13 that (X, \mathcal{L}) is a convex geometry. □

Theorem 32: Suppose that $S: 2^X \rightarrow 2^X$ satisfies (EX1)–(EX3) and Aizerman. Define $\mathcal{L} \subseteq 2^X$ by (1). Then, (X, \mathcal{L}) is a convex geometry and we have $S = \text{ex}_{\mathcal{L}}$.

(Proof) 定理 26 によつて, \mathcal{L} はアララインメント, $\text{ex}_{\mathcal{L}} \subseteq S$, かつ, 任意の $K \in \mathcal{L}$ に対して, $S(K) = \text{ex}_{\mathcal{L}}(K)$ である事に注意しておく.

最初に, \mathcal{L} が凸幾何という事を示す. $A \subseteq X$ を任意とする. 定理 26 と補題 11 によつて,

$$S(\tau(A)) = \text{ex}_{\mathcal{L}}(\tau(A)) \subseteq \text{ex}_{\mathcal{L}}(A) \subseteq \tau(A).$$

上式に **Aizerman** を適用すると, $S(\tau(A)) = S(\text{ex}_{\mathcal{L}}(A))$.

$\text{ex}_{\mathcal{L}}(A) \subseteq S(A)$ が示されたわけであるが, (EX3) と (EX1) によつて,

$$\text{ex}_{\mathcal{L}}(A) = \text{ex}_{\mathcal{L}}(A) \cap S(A) = \text{ex}_{\mathcal{L}}(A) \cap S(S(A)) \subseteq S(\text{ex}_{\mathcal{L}}(A)).$$

(EX1) を用いて, $\text{ex}_{\mathcal{L}}(A) = S(\text{ex}_{\mathcal{L}}(A))$.

したがって,

$$\text{ex}_{\mathcal{L}}(A) = S(\text{ex}_{\mathcal{L}}(A)) = S(\tau(A)) = \text{ex}_{\mathcal{L}}(\tau(A)). \quad (2)$$

定理 13 によって, \mathcal{L} は凸幾何である.

次に, $S = \text{ex}_{\mathcal{L}}$ を示す. 式(2)と定理 26 によって,

$$S(\tau(A)) = \text{ex}_{\mathcal{L}}(A) \subseteq S(A) \subseteq \tau(A).$$

これに **Aizerman** を適用すると,

$$\text{ex}_{\mathcal{L}}(A) = S(\tau(A)) = S(S(A)) = S(A).$$

□

Koshnevoy の結果との比較

Corollary 33: *A mapping $S: 2^X \rightarrow 2^X$ is the extreme operator of a convex geometry if and only if S satisfies (EX1)–(EX3) and (EX6). Furthermore, a convex geometry is uniquely determined by its extreme operator. \square*

関数 $S: 2^X \rightarrow 2^X$ は、以下の (C1)–(C2) を満足するとき **選択関数** と呼ばれる。

$$(C1) \quad S(\emptyset) = \emptyset.$$

$$(C2) \quad \emptyset \neq S(A) \subseteq A \quad (\emptyset \neq A \subseteq X).$$

Koshevoy の結果は, 上と同値な

Corollary 34 (Koshevoy): *A choice function $S: 2^X \rightarrow 2^X$ is the extreme operator of a convex geometry if and only if S satisfies Path Independence.* \square

Remark 35: Koshevoy は, 選択関数 $S: 2^X \rightarrow 2^X$ が与えられたとき,

$$\bar{S}(A) = \bigcup \{A' \mid A \subseteq X, S(A') = S(A)\} \quad (A \subseteq X)$$

で $\bar{S}: 2^X \rightarrow 2^X$ を定義して, もし S が **Path Independence** を満足するならば, \bar{S} が, ある凸幾何の閉包演算子であることを示した.

凸幾何は端点演算子によって一意に決定される. もし S が **PI** を満たすのであれば, Koshevoy の結果も A の結果も同一の凸幾何を与える.

よって, 我々の結果 (定理 32) と Koshevoy の結果は同じ結論を導きますが, 途中の経過が違うので互いに補完し合うものである.

Remark 36: Chernoff を満足する一般の S に対して, A の結果は必ずアラ
 イメントを与えるに対して \bar{S} は閉包演算子にならない. 注意 27 の例を見てみ
 よう. $\bar{S}(\{c\}) = \{a, b, c\} \not\subseteq \{c, a\} = \bar{S}(\{c, a\})$ である.

$$abc \mapsto c$$

$$\bullet \mapsto ab \quad \bullet \mapsto ca \quad \bullet \mapsto bc$$

$$\bullet \mapsto a \quad \bullet \mapsto b \quad \bullet \mapsto c$$

$$\bullet \mapsto \emptyset$$

$$S: 2^X \rightarrow 2^X$$

One More Characterization

For an alignment (X, \mathcal{L}) and $A \in \text{ex}(\mathcal{L})$, let us consider family $\text{ex}^{-1}(A)$. If $B \in \text{ex}^{-1}(A)$, then we have $A = \text{ex}(B) \subseteq B$. Hence, $\text{ex}^{-1}(A)$ has a minimum element A .

Theorem 37 (Dean and Johnson for “if part”): *An alignment (X, \mathcal{L}) is a convex geometry if and only if for each $A \in \text{ex}(\mathcal{L})$ $\text{ex}^{-1}(A)$ is an interval.*

(Proof) (“if” part:) Suppose that (X, \mathcal{L}) is a convex geometry and let $A \in \text{ex}(\mathcal{L})$. We claim that $\text{ex}^{-1}(A) = [A, \tau(A)]$. Let $B \in \text{ex}^{-1}(A)$. We have shown that $A \subseteq B$. Also, we have from Corollary 14 that $B \subseteq \tau(B) = \tau(\text{ex}(B)) = \tau(A)$. Conversely, suppose that $A \subseteq B \subseteq \tau(A)$. Since we have from Theorem 13 that $A = \text{ex}(\tau(A))$, it follows from (Aizerman) that $\text{ex}(B) = A$.

(“only if” part:) Suppose that for each $A \in \text{ex}(\mathcal{L})$ $\text{ex}^{-1}(A)$ is an interval $[A, B]$ for some $B \subseteq X$. We will show that ex satisfies Aizerman.

Suppose that $\text{ex}(D) \subseteq C \subseteq D$ for $C, D \subseteq X$. Let $A = \text{ex}(D)$. Since $D \in \text{ex}^{-1}(A)$, we have $C \in \text{ex}^{-1}(A)$, i.e., $\text{ex}(C) = A = \text{ex}(D)$.

It follows from Theorem 31 that (X, \mathcal{L}) is a convex geometry. \square

Characterization of Distributive Lattices

Theorem 38 (Koshevoy (see also 柏原-岡本)):

Suppose that (X, \mathcal{L}) is a convex geometry. Then, \mathcal{L} is a distributive lattice if and only if $S := \text{ex}$ satisfies:

(Expansion) $\forall A, B \subseteq X: S(A) \cap S(B) \subseteq S(A \cup B)$.

(Proof) (“only if” part:) Suppose that \mathcal{L} is a distributive lattice. Then, \mathcal{L} is the set of order ideals of a poset $P = (X, \preceq)$ and we have

$$\text{ex}(A) = \{a \mid a \in A, \nexists b \in A: a \prec b\}.$$

Then, it is easy to see that for each $A, B \subseteq X$ we have $\text{ex}(A) \cap \text{ex}(B) \subseteq \text{ex}(\text{ex}(A) \cup \text{ex}(B))$. Applying **Path Independence Expansion**.

(“if” part:) See [Koshevoy]. \square

References

- [1] M. A. Aizerman and A. V. Malishevski. General theory of best variants choice: some aspects. *IEEE Transactions on Automatic Control*, 26:1030–1040, 1981.
- [2] H. Chernoff. Rational choice functions and orderings. *Econometrica*, 22:121–127, 1954.
- [3] R. A. Dean and M. R. Johnson. Path independent choice functions and their lattices. Working Paper 1999-2, Department of Economics, Tulane University, July 1999.
- [4] P. Edelman and R. Jamison. Theory of convex geometries. *Geometriae Dedicata*, 19:247–270, 1985.
- [5] K. Kashiwabara and Y. Okamoto. A greedy algorithm for convex geometries (in Japanese). *RIMS Kokyuroku*, 1174:179–191, 2000.
- [6] G. A. Koshevoy. Choice functions and abstract convex geometry. *Mathematical Social Science*, 38:35–44, 1999.
- [7] H. Moulin. Choice functions over a finite set: A summary. *Social Choice Welfare*, 2:147–160, 1985.